

瓜連地区の新発見資料

那珂市歴史民俗資料館

土器片墨書「倭文田長」の発見

この土器片は、平成30年度の下大賀遺跡のうち国道118号線の西側取り付け道路調査によって発見されました。『常陸風土記』の中には「(久慈)郡の西口里に静織の里あり」とあります。静織は、倭文部と呼ばれる織物を職業とする集団の人々である部民によって織られたもので、それらは祭祀などに使われたものといわれています。そのため、後に静織は「倭文」とも記され「倭文郷」などの呼び名も生まれました。静神社の祭神倭文神建葉槌命は武神であるとともに織物の神でもあります。

この「倭文」の文字が、墨書ではありますがこの地域から出土し、明記された文献として確認されたのは今回が初めてであるだけに、大変貴重な発見といえます。



なお、石岡市「鹿の子遺跡」から出土した漆紙文書のうち、750年から792ごろの戸籍に倭文部の名が数名見ることができます。また、『万葉集』巻20の防人の歌にも倭文部可良麻呂の歌が載っています。

下大賀遺跡の発掘により、この地には玉石を敷き詰めた古代の道が東西に走っていたこと、久慈川を越えた薬谷地区(旧金砂郷村)に置かれた久慈郡の郡役所(郡衙)に近く、そこに納める税の貯蔵倉庫群もあったかとも推定もされています。

瓜連城と楠木正家

金砂山城に拠った佐竹秀義を破った源頼朝は、瓜連の地を家臣の二階堂氏・加志村氏などに与え、後には執権北条氏が得宗領(直轄領)として支配し一族の北条貞国に与えました。貞国は、この頃に久慈川沿いの高台に瓜連城を構えたものと思われます。その後、鎌倉幕府を倒し朝廷の権威・権力を回復しようとした後醍醐天皇は、陸奥国の入口に当たる要衝の地瓜連に注目して、ここを抑えるために忠臣楠木正成を配しました。楠木氏は、元は駿河国楠木の荘(清水市)に住む鎌倉幕府の御家人で、後に一族は河内国をはじめ諸国に散ったといわれていますが、楠木氏は正成・正行父子共に最後まで南朝方に忠誠を捧げました。この楠木正成は、自分の代わりに一族の楠木正家を瓜連城内に送り、正家は南朝方に味方して北朝方の佐竹貞義・義篤父子軍と激戦を続けました。



この時に、瓜連方に加勢したのが筑波山麓の小田治久や那賀城(旧小瀬村)に拠っていた那珂通辰らです。しかし、この瓜連城は佐竹軍に敗れ楠木正家は脱出して東北の地に逃れ、後に楠木正行とともに大坂四条畷の合戦で戦死しています。瓜連の素鷲神社には、四条畷神社で作成された珍しい楠木正家の武者像が保存されています。父の正成はこれより早く湊川で戦死し、同じく南朝方に味方した肥後国(熊本県)の菊池氏代々の勤王とともに称えられているところです。

門部銀山寺観音堂の聖観音立像

常福寺は、14世紀に現在地より西方にある「白蓮塚」の地に了実を開山として佐竹貞義によって建てられました。この常福寺は、2代目聖岡の時代、^{げんちゅう}元中5年(1388)にあった瓜連宿の大火により類焼しましたが、応永12年(1405)に佐竹義宣が瓜連城内の現在地に移し再建しました。佐竹氏は静神社の神宮寺として弘願寺や静安寺を建立するとともに、城内に祀られていた牛頭天王社(素鷲神社)の再興をはたすなど、神仏の信仰にも努めています。

享禄元年(1518)には、常福寺の末寺として門部の地に銀山寺が創建されました。2018年に銀山寺境内の観音堂から発見された聖観音菩薩立像は、胎内墨書から鎌倉時代末期の永仁5年(1297)に浅草寺の部材をもって彫刻師快慶派の定快によって彫られたものであることがわかりました。この観音像が、いつ誰によって門部の地にもたらされたのかは今後の課題です。



浄鑑院の阿弥陀三尊像

常福寺からは鎌倉時代作の極小脇侍付阿弥陀如来像が発見されました。^{まきえ ずし}蒔絵厨子の銘文「この弥陀観音勢至三像は我が家に伝え在り、今、封内浄鑑院に寄す。以て克く四衆を供養すと云う。(貞享四年歳次丁卯十一月穀旦、水戸侯源光圀識)」とあるように、徳川光圀の念持仏であった阿弥陀三尊像を浄鑑院に寄進したものです。貞享4年(1687)は、義公光圀が伯父武田信吉の菩提を弔うために新たに浄鑑院を建立することが決定された年です。

額田の向山に建立された「浄鑑院常福寺」は、瓜連「草地山蓮華院常福寺」に代わって本寺となり、瓜連には寺を守護する院代が置かれました。浄鑑院は、徳川斉昭の社寺改革で一旦は廃寺となり、寺宝は寺績を含めて瓜連に戻されました。斉昭が失脚した後、浄鑑院はまもなく復活しましたが、幕末の天狗・諸生の争乱で焼失してしまいました。

光圀が寄進したこの三尊像は、1.5^{センチ}、両脇侍0.8の極小仏像です。光圀は、必ずその行為の背景について記録を残しています。この像が大切に保存され、光圀の意思が今日まで継承されてきた意義は大きいものがあります。



厨子入阿弥陀如来立像及両脇侍像



蒔絵厨子底の銘文